

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 呉美・

本論文は安部公房の「満洲」からの引き揚げ体験に着目し、帰属の根拠の喪失、支配関係の反転を意味したこの経験が、戦後日本の状況の特異な視点から相対化していくことになる道行きを論じたものである。

一、二章では、初期の『終りし道の標べに』と『名もなき夜のために』の二作品が検討されている。故郷へのノスタルジアが、かえってそのイメージの重層化、主体の分裂を招くことになる様相、共同体への「帰郷」の不可能が自己言及的な構造のうちに浮き彫りにされていくプロセスを指摘したくんだり、いずれも従来の評価の変更を迫るものであり、昭和十年代のリルケブームを媒介に、かつての「純粋小説」論議を戦後に接続することになる史的意義の評価と共に、注目に値するものといえよう。

二、三章では、変身と寓意をテーマにした、『壁』『デンドロカカリヤ』『闖入者』が分析の対象にされている。1950年代、左翼陣営の側に反米愛国主義が高まる機運を背景に、植民地体験による主体の喪失がメタモルフォーゼ(変身)のテーマを育んでいくことになる道行きが明らかにされた上で、アメリカの占領政策が戦前日本の植民地政策とアナロジカルに捉えられる必然性が分析されている。

五、六章では、現実の政治的な要請からドキュメンタリーへの志向が強まり、それと共にそれまでの観念的な文体が即物的な文体に移行していく経緯が解明されている。

『けものたちは故郷をめざす』において引き揚げが頓挫するその過程が、当時の「引き揚げ」の概念に対する痛烈な批判にもなっている、という指摘と共に傾聴に値しよう。

七、八章では安部がそれまでの左翼的ナショナリズムに違和を感じ、60年安保以後の戦後的理念の変質を背景に、マクロな問題をミクロな立場から見るようになる変化が『砂の女』を通して明らかにされ、あわせてクレオールに、複数言語の混交よりもむしろ、伝統を拒否する側面を評価しようとした安部の特色について言及されている。

今後なお、より多くの作品検証が期待されるが、従来安部公房の文学を論じる際に自明の前提とされてきたコスモポリタニズム、メタモルフォーゼといった概念を、あらためて引き揚げに伴うアイデンティティの自己相対化、という観点から、戦後の状況論と相関させて論じた独創性は高い評価に値する。以上の点から、審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。